

さくらそう通信 NO 2

日本さくらそう友の会

ついに弥生 3 月です。肌寒い風がさくらそう鉢のうえをわたっていきます。芽がわずかに出たもの、まだ、地中に潜っているものなど、様々です。庭の木陰で節分草が咲いています。福寿草も 10 センチぐらいにのび暖かい春が待たれます。

河崎さんは 2 月 10 日に芽分け完了、自分は 7 日に 12 月から続いた長い作業が終わりました。清水さんはプランターから芽が出てきたと言っています。植え替えをしていないので、少し不安が残ります。渡邊さんは 3 月 4 日 3 ミリ 5 日 4 ミリと新芽を確認。今週は寒さが続くようなので伸びはあまり期待できませんね。

さくらそうの生い立ちと流行の歴史 江戸時代寛文年間（1661 から 1672 年）からその栽培がはじめられたといわれています。そして元禄、享保、寛政、文化、文政、天保時代と益々その流行発達をみた純日本産の、いわゆる古典園芸植物で 300 年の栽培の歴史があります。関東の荒川上流の浮間が原や戸田が原などに自生地があります。これらのさくらそうの花見は享保のころから始まり、江戸の文人墨客は盛んに出かけ、また、荒川のほとり、鷹を追う江戸武士などが、野外散策の土産に持ち帰り、鉢植えとして鑑賞したなどといわれています。

流行の初期は享保時代、そして明治初期、昭和 28 年ごろから再興期といくたの盛衰をかさねて多くの人に愛され、栽培されています。

* 乾燥が続いたら水キレに注意

早いものは 4 センチ位に伸びた

大好きな 節分草

